



擬似濃音化字音素

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 車, 美愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004554

疑似濃音化字音素

車 美 愛

車（1996、1997、1998、1999）では、3種の28個の濃音化字音素について検討したが、濃音化を生じる字音素はこれだけではない。そのほかにも平音・濃音の交替を生じる字音素がいくつかある。それらは濃音化例が少ないため濃音化字音素の中を含めなかったが、鳴音後濃音化の全体的記述にとっては無視することができないものである。これを疑似濃音化字音素と呼ぶことにする。性質上いくつかのタイプに分けられるけれども、韓国語字母順に検討することにしよう。

1. 【果】 /과/

【果】を含む語はかなりあるが、濃音化例は極めて少ない。今回の調査で拾った約80個の例のうち、少なくとも一つの辞典¹⁾で濃音化の表記があるものは次の四語だけである。「戦' 果 전과」一つだけが三辞典とも濃音化するとしている。

(1) 桑果 상과 |肉質集合果|、成果 성과、戦' 果 전과、効果 효과²⁾

「桑果 상과」では<果実>の意味で、他の三語では<果報・結果>の意味で用いられている。いずれの意味においても、また語構成の如何にかかわらず、上の四語を除いては濃音化は生じない。

(2) a. <果実>

橄欖—果 감람과 |カンランの実|、乾燥—果 건조과 |ドライフルーツ|、
禁果 금과 |禁断の木の实|、吉祥—果 길상과 |鬼子母神が手に持つ果实、石榴|、
沙果 사과 |りんご|、樹果 수과 |樹木の果实|、時果 시과 |その時期の果实|、
實果 실과 |食べられる果实|、菴摩羅—果 암마라과 |マンゴーの実|、
越年—果 월년과 |二年果|、梨果 이과 |りんご、梨の類|、珍果 진과 |珍しい

果物}、菜果 **채과** {野菜と果実}、青果 **청과**、花果 **화과** {花と実} など

b. <果報・結果>

感果 **감과** {原因に応じて生じた結果}、結果 **결과**、善果 **선과** {善い報い}、
聖果 **성과** {修行を積んで得た涅槃}、勝果 **승과** {立派な果報}、因果 **인과**、
證果 **증과** {修行により悟りを開いた結果}、現果 **현과** {過去の因業により
現在得る果報}、好果 **호과** {好結果} など

したがって、【果】は到底濃音化字音素とは認められない。(1) のような例は純然たる辞書の例外として記述するしかない。

2. 【卦】 /괘/

字音素【卦】を含む語の大部分は六十四卦の名称であり、その他に連体修飾的要素の付いた表現などがいくつかある。若干の用例において濃音化を生じるが規則性は全くないと言ってよい。そもそも、【卦】を含む語については語構成の表示からして規則性がないようである。『民衆』によれば「二文字語+【卦】」の構成は一貫して「歸妹一卦 **귀매괘**」、「既濟一卦 **기제괘**」、「大過一卦 **대과괘**」のように境界を表示しているけれども、「一文字語+【卦】」の構成では一貫性が見られない。「艮一卦 **간괘**」、「蠱一卦 **구괘**」、「比一卦 **비괘**」、「賁一卦 **비괘**」、「否一卦 **비괘**」、「師一卦 **사괘**」のように境界を表示した例のほうが多いけれども、「升卦 **승괘**」、「豫卦 **예괘**」のように単純語として表記した例も少なくない。他の辞典でも大同小異であるが、これらを区別する根拠は見当たらない。二文字要素に付く場合に境界をはさむなら、一文字要素にも境界を表示すべきだと考えられる。以下の例についてはこの解釈にしたがって境界を表示することにする。また、六十四卦の名称以外の表現においても境界表示に混乱が見られる。「無卦 **무괘**」{五年続く悪い運}、「問卦 **문괘**」{占卦で吉凶を見ること}、「下卦 **하괘**」{六爻の下の卦、よくない卦} など大部分の語では境界を置いていないが、「上一卦 **상괘**」{六爻の上の卦、一番いい卦} と「中一卦 **중괘**」{良くも悪くもない卦} に限っては境界を表示している。この場合には境界を置かない形で統一すべきであると考えられる。

このように境界表示の問題を解決したところで濃音化の分布が規則的になるわけではない。つまり、【卦】の濃音化は語構成や意味構造とは全く関係がない。調査した三辞典

典ともに濃音化すると表記しているのは次の五語だけであった。

- (3) 觀一' 卦 관괘、吉一' 卦 길괘 {吉な卦}、
上一' 卦 상괘 {六爻の上の卦、一番いい卦}、
中一' 卦 중괘 {良くも悪くもない卦}、豊一' 卦 풍괘

そして、次の例については辞典間で表記の違いが見られた。この種の例が多いことが不規則性を端的に表している。

- (4) 家人一卦 가인괘、坎一卦 감괘、蹇一卦 겐괘、乾一卦 건괘、
困一卦 곤괘、坤一卦 곤괘、遯一卦 돈괘、同人一卦 동인괘、
屯一卦 둔괘、无妄一卦 무망괘、訟一卦 송괘、節一卦 절괘、
占一卦 점괘 {占いの卦}、漸一卦 점괘、凶一卦 흉괘 {不吉な卦}

以上以外の例についてはどの辞典も濃音化しないと表記している。

(5) a. 六十四卦の名称

艮一卦 간괘、蠱一卦 구괘、歸妹一卦 귀매괘、既濟一卦 기제괘、
大過一卦 대과괘、大有一卦 대유괘、大壯一卦 대장괘、明夷一卦 명이괘、
未濟一卦 미제괘、比一卦 비괘、賁一卦 비괘、否一卦 비괘、師一卦 사괘、
小過一卦 소과괘、巽一卦 손괘、損一卦 손괘、隨一卦 수괘、需一卦 수괘、
升一卦 승괘、旅一卦 여괘、豫一卦 예괘、離一卦 이괘、頤一卦 이괘など

b. 連体修飾関係

無卦 무괘 {5年続く悪い運}、問卦 문괘 {占卦で吉凶を見ること}、
陽卦 양괘 {八卦のうち陽に属する卦}、有卦 유괘 {7年続く吉運}、
陰卦 음괘 {八卦のうち陰に属する卦}、八卦 팔괘、
下卦 하괘 {六爻の下の卦、よくない卦}

辞典によって濃音化を表記する例の数にかなり差があるようであるが、濃音化例を一番多く表記している『三省』においても、濃音化しない例のほうがはるかに多く、また

濃音化例と非濃音化例を区別する根拠もまったく見当たらない。したがって、【卦】の濃音化例も純粋に辞書的な例外である。

3. 【句】 / 구 /

【句】を含む語例はかなりあるけれども、複合語の例は少なく辞典の見出しとなるものはあまり多くない。今回の調査で拾ったのは次の七語である。

- (6) 驚人一句 경인구 {人を驚かせるほど卓抜した詩句}、慣用一句 관용구、
글一句 {文句}、短命一句 단명구 {文意に短命が象徴されている句}、
名詞一句 명사구、引用一句 인용구、形容一句 형용사구

この濃音化の分布を見ただけでは【句】を濃音化字音素に含めるべきかどうか判断に迷う。しかし、言語学用語としては上に挙げたもののほかに「副詞一句 부사구」、「動詞一句 동사구」、「前置詞一句 전치사구」などがあり、いずれも濃音化は生じていないようである。したがって、これらも含めて考えるならば濃音化字音素としての性格は非常に弱いと見なさざるを得ない。

一方、単純語構成では、濃音化しない場合が圧倒的に多い。今回拾った47個の例のうち三辞典ともに濃音化しているのは(7 a)の六例、辞典間で表記の異なるものは(7 b)の七例だけであり、その他は(7 c)のような濃音化を生じない。

(7) a. 濃音化するもの

傑' 句 절구 {非常によくできた詩句}、驚' 句 경구 {驚人句の略}、
對' 句 대구、文' 句 문구、美' 句 미구、詩' 句 시구

b. 辞典間で表記の異なるもの

結句 절구、警句 경구、難句 난구、名句 명구、成句 성구、
聖句 성구 {聖書の文句}、脱句 탈구 {抜け落ちた句}

c. 濃音化しないもの

佳句 가구、古句 고구 {昔の文句、古人の文句}、禁句 금구、金句 금구、
起句 기구、奇句 기구 {奇抜な句}、妙句 묘구、美辭 麗句 미사 여구、

半句 반구、秀句 수구、語句 어구、言句 언구 {語句}、聯句 연구、
類句 유구、逸句 일구 {優れた句}、一句 일구、字句 자구、章句 장구、
轉句 전구、絶句 절구、珍句 진구など

こうした濃音化の分布の背後にはなんの規則性も傾向も感じ取れない。したがって、字音素【句】も濃音化字音素の中に含めないほうが妥当である。

4. 【櫃】／궤／

【櫃】《ものをに入れる木製の箱》を含む語としては次のようなものがある。

(8) a. 濃音化するもの

文書一' 櫃 문서궤 {書類などを入れる箱}、
時在一' 櫃 시제궤 {使い残しの金を入れる箱}、
印' 櫃 인궤 {官印を入れる箱}、
佩物一' 櫃 띠물궤 {金銀装飾品を入れる箱}、
香' 櫃 향궤 {香を入れる箱}、돈一' 櫃 {金箱}、
손一' 櫃 {手文庫}、실一' 櫃 {糸箱}

b. 濃音化しないもの

金櫃 금궤 {金・鉄の箱}、書櫃 서궤 {本を入れる箱}、
倭櫃 왜궤 {男性用家財道具の一つ}、鐵櫃 철궤 {鉄の箱}、
쌀一櫃 {米びつ}

この濃音化の分布を見ると、語例数が少ないことを除けば、【櫃】を濃音化字音素の中に含めてもいいように見える。しかし、この字音素の性格をよく考えてみると、濃音化字音素という漢字成分として扱うよりは、固有語要素として処理する方がはるかに妥当ではないかと思われる。確かに、辞典によれば【櫃】はれっきとした漢字成分であるとされているけれども、稿者を含めて普通の母語話者の語感では固有語要素に感じられる。《ものをに入れる木製の箱》の意味で単独で用いることもでき、少なくともそれが使われていた時代においては非常に日常的な語であったと考えられる。しかも、(8)に見られる濃

音化の分布は、固有語の複合語における濃音化の原則（注3）に概ねのっついていると考えられる。例外は「**쌀櫃**」が濃音化しないことぐらいである。

車（1996、1998、1999）において濃音化字音素として扱ったものの中にも、【間】、【床】、【房】、【帳】など固有語的性格が感じられるものがあることを述べた。それらは、濃音化例が多く、また固有語要素としては説明できないような用法も持っているので、濃音化字音素の中を含めたのであるが、本質的には【櫃】と共通する部分が多い。

一般に、字音素が次のような条件を満たすとき、固有語化していると思なすことができる。

- (9) a. 母語話者に固有語と感じられる。
- b. 単独で用いることができる。
- c. 固有語と結合する。
- d. 固有語との結合において固有語を支配する原則に従う。

【櫃】はこのすべてをほぼ満足させている。疑似濃音化字音素の中にはこのほかにいくつかこのタイプのものがある。

5. 【毒】／毒／

【毒】も、少なくとも複合語成分としては、固有語化した成分である。次のような複合語の例があり、濃音化を生じている。

- (10) a. 粉一' 毒 분독 {おしろいの毒}、
 鍼一' 毒 침독
- b. 눈一' 毒 {物欲しげに見ること}、
 돈一' 毒 {金に夢中になること}、
 손一' 毒 {手についでる毒}

(10 a) は漢字成分との結合であるけれども、「粉 분」、「鍼 침」自体が固有語化していると考えられ、そうすると(10)の例はすべて固有語との結合ということになる。単独

でも用いられるし、濃音化の分布は固有語の原則に合っている。複合語例として他に「ㄱ-毒」{犬の齒から出る毒}があり濃音化しないのであるが、これも第一要素が生物名詞である場合には濃音化しないと言う固有語の原則に従っている。このほか次の二例については辞典間で表記が異なる。

(11) 憤-毒 분독 {腹立つしさ}、꺄-毒 {旅疲れ}

ただし、「憤毒 분독」は複合語としない辞典もあり、そのほうが妥当であるかもしれない。

単純語構成では濃音化は生じない。

(12) 内毒 내독 {内部にある毒気}、路毒 노독 {旅疲れ}、蛇毒 사독、暑毒 서독、暗毒 암독 {性質が陰険でき凶悪なこと}、陽毒 양독 {猩紅熱}、魚毒 어독 {魚の体内にある毒素}、餘毒 여독 {後々まで残る害}、旅毒 여행독 {旅による害毒や疲労}、鉛毒 연독、煙毒 연독 {煙の毒気}、炎毒 염독 {夏暑の毒気}、怨毒 언독 {激しく恨むこと}、遺毒 유독 {害毒を及ぼすこと、残っている毒}、流毒 유독 {世の中に害毒が広がること}、有毒 유독、飲毒 음독 {服毒}、至毒 지독 {ひどい、猛烈なこと}、旱毒 한독 {旱魃による病気}、害毒 해독、後毒 후독 {余毒}

6. 【瓶】／병／

字音素【瓶】もある程度まで固有語としての性格を備えている要素である。しかしながら、固有語の原理で説明できない例が多く、純然たる漢字語の表現も多い。記述上は、意味関係だけに注目して整理したほうがわかりやすい。つまり、【瓶】は次のように独立の語と結合して【~を入れるための瓶】の意味のときに限って濃音化を生じる要素である。

(13) 牛乳-’ 瓶 우유병、酒水-’ 瓶 주수병 {酒や水の瓶}、醋-’ 瓶 초병 {酢の瓶}、물-’ 瓶 {水の瓶}、술-’ 瓶 {酒の瓶}

複合語構成でも意味関係がこれと異なる場合には濃音化は生じない。

- (14) 噴水－瓶 분수병 [花瓶に水をまくための瓶]、比重－瓶 비중병 [液体の比重を測定する容器]、沙器－瓶 사기병 [陶器の瓶]、琉璃－瓶 유리병 [ガラス瓶]、二重－瓶 이중병、磁気－瓶 자기병 [核融合でプラズマを入れる磁気場]、點眼－瓶 점안병 [眼薬点眼の瓶]、集氣－瓶 집기병、秤量－瓶 칭량병、哺乳－瓶 포유병、海流－瓶 해류병、葫蘆－瓶 호로병 [ひょうたん形の瓶]、자라－瓶 [すっぽんの形の瓶]

ただ『民衆』だけが「洗氣－’ 瓶 세기병」[ガス中の不純物を除去する瓶]に濃音化表記を与えているが、他の辞典には記載がない。

一方、単純語構成では意味関係にかかわらず濃音化は生じない。

- (15) 金瓶 금병 [金の瓶]、洗瓶 세병 [実験洗滌用の瓶]、小瓶 소병、溲瓶 수병 [おかわ]、銀瓶 은병 [銀の瓶]、酒瓶 주병 [酒の瓶]、鐵瓶 철병、花瓶 화병、畫瓶 화병 [表面に絵をかいた瓶]

7. 【煞】／살／

字音素【煞】を含む語は次の三例しか見当たらなかった。そのいずれも濃音化を生じている。

- (16) 亡身－’ 煞 망신살 [身を滅ぼしたり恥をかいたりする不運]、
喪門－’ 煞 상문살 [死人の方から広がってくる害気]、
喪夫－’ 煞 상부살 [夫と死別する不運]

濃音化しない例がないという意味では完全な濃音化字音素であるが、あまりにも語例が少ないため濃音化字音素に含めなかった。

8. 【盞】／잔／

【盞】は完全に固有語的な要素である。前出の固有語の条件（9）をすべて満たしている上に、次のような複合語例があるだけで、単純語成分となっている例が一つも見られない。

(17) a. 濃音化するもの

대포-’盞 {大きな酒杯}、焼酒-’盞 소주잔、술-’盞 {酒杯}、
洋酒-’盞 양주잔 {洋酒用のグラス}、祭酒-’盞 제주잔 {祭酒用の杯}、
茶-’盞 차잔 {茶碗}、退酒-’盞 퇴주잔 {祭祀用の杯の一つ}

b. 濃音化しないもの

沙器-盞 사기잔 {陶磁器の杯}、나무-盞 {木の杯}、뿔-盞 {角製の杯}、
큰-盞 {大きな杯}、한-盞 {一献、一杯}

濃音化するものは、「대포盞」を除いてすべて《～用の杯》の意味である。これは用途の関係であるから固有語における濃音化の原則に合っている。「대포盞」の「대포」は {大きな杯} を意味する語であるので (17 a) の他の語とは異なる意味関係にあるように思われる。しかし、「대포」には「대포-술」 {大杯で飲む酒} の略語としての用法もあり、「대포盞」の「대포」はこの略語であると見なせば、他の語と同じ意味関係の表現であると考えられることもできる。

一方、濃音化しないもののうち最初の三例は材料の関係、後の二例は連体修飾関係である。いずれの関係も固有語においては濃音化が生じないから、これもまた固有語の原則に合っているとと言える。

9. 【犧】／장／

【犧】も固有語と見なしたほうがいい要素である。先に述べた固有語の条件をすべて満足させている。次のような用例がある。

(18) a. 濃音化するもの

茶一' 櫛 지장 [茶筆筭]、머리一' 櫛 [枕元に置く物入れ]、
버선一' 櫛 [足袋を入れる小さい筆筭]、신一' 櫛 [履物入れ、下駄箱]、
이불一' 櫛 [布団筆筭]、자리一' 櫛 [寝具を入れておく筆筭]

b. 濃音化しないもの

單層一 櫛 단층장 [單層（一層）の筆筭]、梧桐一 櫛 오동장 [桐の筆筭]、
層一 櫛 층장、樺榴一 櫛 학류장 [紫壇で造った衣装筆筭]、
花草一 櫛 학초장 [花草模様の衣装筆筭]、새一 櫛 [鳥籠]、토끼一 櫛 [兎小屋]

「茶 지」も固有語化した要素であるから、(18 a) の例はすべて固有語との結合ということになる。したがって、一見、固有語との結合では濃音化し漢字語との結合では濃音化しない、というような一般的記述ができそうであるけれども、実際はそうではないだろう。やはり、固有語の濃音化に関する原則に従っていると考えたほうがいい。(18 a) の「머리 櫛」は場所の関係の結合であり、他はすべて用途の関係である。一方、(18 b) の漢字語との場合はいずれも形状を表す連体修飾の関係であるから濃音化せず、最後の固有語と結合した二例は第一要素が生物名詞であるから濃音化しないと考える方が妥当であろう。(18 b) の類の表現としてはこのほかに「二層一 櫛 이층장」[二層の筆筭]があるが、これについては『民衆』だけが濃音化を表記している。

単純語構成では濃音化するものとして「籠' 櫛 농장」[衣装筆筭]、「饌' 櫛 잔장」[茶筆筭、水屋]の二例、濃音化しないものとして「衣 櫛 의장」[衣装筆筭]があった。濃音化する例については、複合語と見なしてもさしつかえないように思われる。

10. 【勢】／세／

【勢】を含む複合語は非常に少ない。そのまた一部が濃音化を生じるに過ぎない。

(19) a. 濃音化するもの

바람一' 勢 [風の勢い]、터一' 勢 [地元風を吹かせること]、
판一' 勢 [物事の成り行き]

b. 濃音化しないもの

急騰一勢 급등세、騰貴一勢 등귀세

내림一勢 {物価の低落、下がり目}

固有語の原則にしたがっているようにもみえるが、「터勢」、「판勢」では意味の融合・特殊化が進んでおり、分析的に記述するのは難しい。語例の少なさから考えても、単純に辞書的に処理するのがもっとも妥当であると思われる。

単純語構成の例はかなりあるが、決して濃音化は生じない。

- (20) 加勢 가세、強勢 강세、去勢 거세、軍勢 군세、氣勢 기세、多勢 다세、
黨勢 당세 {党・党派の勢い}、大勢 대세、騰勢 등세 {物価騰貴の勢い}、
無勢 무세、商勢 상세 {商況}、守勢 수세、隨勢 수세 {世の情勢に従うこと}、
勝勢 승세 {物価の上がる形勢}、乗勢 승세 {時世・勢いに乗ずること}、
時勢 시세 {時勢・相場}、雨勢 우세 {雨の勢い、雨足の強さ}、姿勢 자세、
戰勢 전세、情勢 정세、助勢 조세、總勢 총세、態勢 태세、風勢 풍세、
虛勢 허세

注)

1) 次の三辞典である。

『국어대사전』李熙承編、民衆書林：ソウル、1991年

『세우리말큰사전』申琦澈・申瑢澈編、三省出版社：ソウル、1984年

『最新改定三星版 국어대사전』韓國語辭典編纂會編、三星文化社：ソウル、1991年

2) 『표준한국어발음대사전 標準韓國語發音大辭典』には「桑果 상과」を除いた三語は濃音化すると表記している。

3) 車(1998)においても言及している。

ここでは従來の記述の中で最も明快で適切であると思われる鄭國(1980)の説に基づいて、その条件を紹介しておこう。

次のような場合に濃音化が生じる。

- a. 先行語が時間を表す場合
 봄－' 비 {春雨}、가을－' 바람 {秋風}、아침－' 밥 {朝御飯}、
 밤－' 잠 {春雨}、보름－' 달 {春雨}、어제－' 밤 {昨夜}
 오늘－' 밤 {春雨}、など
- b. 先行語が場所を表す場合
 산－' 달 {山月}、강－' 달 {川の月}、
 안－' 방 {主婦が起居する内室}、안－' 집 {母屋}
- c. 先行語が起源を表す場合
 남－' 빛 {藍色}、솔－' 방울 {松笠}、
 눈－' 등자 {瞳、瞳孔}、초－' 불 {蠟燭の火}
- d. 先行語が用途を表す場合
 고기－' 배 {漁船}、잠－' 자리 {寢床}

一方、濃音化を生じないのは次のような場合である。

- a. 先行語と後行語が対等の関係である場合－
 마－소 {牛馬}、봄－가을 {春と秋}
- b. 先行語が形状を表す場合
 반－달 {半月}、실－비 {こぬか雨}
- c. 先行語がを材料表す場合
 쌀－술 {米の酒}、콩－밥 {豆御飯}、쌀－밥 {米飯}
- d. 先行語と後行語が同格関係にある場合
 종달－새 {雲雀}、계수－나무 {トンキン肉桂}、
 어미－닭 {親鶏}
- e. 先行語が所有者を表す場合
 사람－집 {人家}、개－다리 {犬の脚}、
 생선－대가리 {魚の頭}、범－기죽 {虎の皮}
- f. 先行語が派生名詞である場合
 해－돋이 {日の出}、장－조림 {牛肉の醬油煮}、
 논－갈이 {田を耕すこと}

参考文献

- 『국어대사전』李熙承編、民衆書林：ソウル、1991年
- 『새우리말큰사전』申琦澈・申瑢澈編、三省出版社：ソウル、1984年
- 『표준국어발음대사전 標準韓国語発音大事典』韓国放送公社（KSB）編、
語文閣：ソウル、1993年
- 『東亞新크리운國語辭典』東亞出版社編輯部編、東亞出版社：ソウル、1985年
- 『朝鮮語大辭典』大阪外国語大学朝鮮語研究室編、角川書店：東京、1986年
- 金 榮起 1975 『Korean Consonantal Phonology』ソウル：塔出版社
- 金 永松 1981 『国語音の研究』ソウル：科学社
- 金 完鎭 1985 『国語音韻体系の研究』ソウル：一潮閣
- 金 鎭宇 1970 「Boundary Phenomena in Korean」『Papers in Linguistics』2.1.
- 南 廣祐 1984 『韓国語の発音研究』ソウル：一潮閣
- 呉 貞蘭 1987 「国語複合語内部の硬音化現象」『言語』12.1:35-53
1988 『硬音の国語史的研究』ソウル：翰信文化社
- 李 秉根 1985 『国語音韻体系の研究』ソウル：開文社
- 任 洪彬 1981 「사이시옷 問題の解決のため」『國語學』10:1-35
- Chung Kook 1980 『Neutralization in Korean : A Functional View』
Seoul : Hanshin Pub. Co.
- 車 美愛 1996 a 「漢字語の濃音化－側音後濃音化の場合」『人文学論集』第14集、
大阪府立大学人文学会：1-30
- 1996 b 「現代韓国語の鳴音後濃音化について」『大阪府立大学紀要（人文・
社会科学）』第44巻、大阪府立大学：67-82
- 1997 「現代韓国語の鳴音後濃音化についてⅡ」『大阪府立大学紀要（人文・
社会科学）』第45巻、大阪府立大学：17-32
- 1998 「Ⅱ類の濃音化字音素－「課」、「級」、「氣」、「宅」、「房」、「病」の
場合－」『人文学論集』第16集、大阪府立大学人文学会：1-16
- 1999 「Ⅱ類・Ⅲ類の濃音化字音素－「床」、「性」、「税」、「状」、「帳」、
「調」、「罪」、「的」の場合－」『人文学論集』第17集、
大阪府立大学人文学会：1-16
- 許 雄 1984 『国語音韻学』ソウル：正音社

1984 『国語学』 ソウル：Seam文化社

Allen, Margaret R. 1974 Vowel Mutation and Word Stress in Welsh. Linguistic Inquiry 4.2

Chomsky, N. and M. Halle 1968 The Sound Pattern of English.
New York : Harper and Row

Martin, S. 1954 Korean Morphophonetics. Baltimore : Waverly Press

(韓国語講師)